

赤石千衣子

さん

●しんぐるまざあず・ふぉーらむ理事長

シングルマザーに必要な支援は、労働環境の改善と生活サポート

「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」は、シングルマザーが子どもと一緒にいきいき楽しく生きられるように、情報提供をしたり、交流の場をつくったり、調査・提言をしているNPO団体。その理事長である、赤石千衣子さんに、シングルマザーを取り囲む社会の現況をうかがった。

●聞き手……白井美樹（ライター）

—赤石さんが、シングルマザーの支援活動を始めた経緯は？

赤石 1980年頃から、私自身シングルマザーとして、「児童扶養手当の切り捨てを許さない連絡会」という母子家庭のグループで活動してきました。そもそものは、母子家庭の生活を支える児童扶養手当制度の改悪に対して、反対するための政策提言を、グループで行っていたのです。

そして1993（平成5）年に、『母子家庭にカンパイ！』（現代書館）という編著を出版するに当たり、「しんぐるまざあ

ず・ふぉーらむ」と団体名にしました。このころから、交流会事業、情報提供事業、相談事業などの支援活動も始めるようになりました。

—1990（平成2）年から現在に至るまで、支援活動の状況はなにか変わってきましたか。

赤石 私たちが、困っているシングルマザーに広く情報提供しやすくなったのは、ごく最近のことだと思います。インターネットを使った活動が多くなり、スマホ

変わらず高いままです。

また、昨年度からは、入学祝い金事業も始めました。これまで、中学や高校の制服代の捻出が難しいという悩みをシングルマザーからよく聞いていたので、365人に3万円ずつ、入学祝い金を届けたのです。

—日本社会の中で、シングルマザーの生活状況は改善されてきているのでしょうか。

赤石 ひとり親家庭の相対的貧困率は、相

変わらず高いままです。厚生労働省の国民生活基礎調査によれば、2012（平成24）年度には、相対的貧困率は54・6%でしたが、今年の7月に発表された15（平成27）年度では50・8%になっていました。ほんの数%だけ下がっているものの、いまだに半数以上のひとり親家庭が貧困に瀕しており、これは異常な事態だと言わざるを得ません。

子どもがいる世帯全体で見れば、相対的貧困率は13%なので、あまりにも大きな開

ユーザーの若いママたちがアクセスしやすくなったのがその理由かと。

また、無料会員制にしたことから、会員数が激増しており、現在は1000人くらいの会員がいます。

2002（平成14）年にNPO法人になったことも大きかったですね。助成金も出るようになり、調査研究活動や電話相談も始めました。東日本大震災のときには、被災地のシングルマザーだけでなく、困っている女性のホットラインをつくったり、被災地支援団体の立ち上げにも協力したりしました。

きがあり、もつと数字が近づいていかないといけないはずです。

—このような大きな差を生んでいる問題点はどこにあるのでしょうか。

赤石 はっきり言って、日本の労働構造が抱えている問題にあります。

働く女性のおよそ半数以上は、結婚や出産を機に、いったん仕事を辞めて専業主婦になります。その後に離婚して、子どもを育てながらゼロから仕事をしようとしても、アルバイトやパート、派遣などの非正規の仕事にしか就けないケースが多いのです。

ちなみに、最低賃金が上がって、就労賃金が多少よくなっているようですが、非正規雇用は拡大しており、ひとり親の非正規

Profile

●あかいし・ちえこ●

1955年生まれ。『児童扶養手当の切り捨てを許さない連絡会』で活動後、1993年、シングルマザーの支援活動を行う「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」発足。2002年、NPO法人となる。反貧困ネットワーク副代表、社会的包摂サポートセンター運営委員。著書に『ひとり親家庭』（岩波新書）等多数。



率は、57%にも及んでいます。政府は正規と非正規の差の溝を埋めるといつているものの、あまり目立った変化があるとは思えませんね。

—シングルマザーが正規の仕事に就いて高収入を得るには、まだまだ困難な状況なのですね。

赤石 女性の場合シングルマザーでなくても、小さな子どもを抱えていると、残業ができなかったり、子どもが高熱を出して仕事を休まざるを得なかったりという事情が付随するので、正規社員を希望しても、面接ではじかれてしまうケースが多いですね。

たとえ正社員になれたとしても、満足のいく賃金が得られない場合も多々あります。経済力開発機構（OECD）の報告では、子育て中の男女の賃金は、男性を10とすると、女性は4となっており、先進国の中で最大の格差があります。家計を一人で支えないといけないシングルマザーにとっては、かなりきつい労働構造となっているのです。

—いまだに、日本では男女の賃金格差が根強く残っているわけですね。

赤石 昔から日本は、メーンの働き手は夫で、妻は補助的な働き手でいいという考え方を続けてきました。そうしたゆがみによる困難が、子育てしながら働かないといけないシングルマザーに押し寄せているわけです。

世界経済フォーラムが毎年発表している「ジェンダーギャップ指数」における順位、つまり男女平等度の指数では、昨年の発表では日本は111位でした。トップは北欧諸国で、先進国が上位を占める中、日本はネパールの次でした。これは、日本は先進国ではないということを、世界に告白しているようなものですよね。

こうした社会構造を変えることはなかなか簡単にいかないでしょう。

—では、シングルマザーの労働状況を改善するには、どんな道があるのでしょうか。

赤石 今後日本は労働者不足になっていくので、企業も力のあるシングルマザーを雇っていきたいと考えるようになるのでは

りますね。

—しんぐるまざあず・ふぉーらむでは、キャリアの支援もされているのですか。

赤石 去年からキャリア支援プログラム「未来への扉」というものを、化粧品会社の「日本ロレアル」と連携して始めました。共通の講座を受けてもらった後、キャリアアカウンセリングを経て、「オフィスワークコース」または「美容部員コース」を選択して受講してもらいます。仕事の技能や知識を無料で学ぶことができ、正社員採用の機会が広がるように支援をしています。すでに、日本ロレアルなどで美容部員として働き始めたシングルマザーもいます。

—シングルマザーの生活支援をするうえで、保健師さんとながらすることはありますか？

赤石 私たちのところには、未婚の妊婦さんや、DVの中で出産しないといけない妊婦さんなど、妊娠中からの相談がよく入ります。あるいは、出産後の、虐待関係や子どもの発達障害の相談を受けることもあります。

そうした場合には、地域の中で保健師さんとながらついたら安心なのではないかな

—と思う、「保健師さんと話したことはありますか？」といったアドバイスをすることはありますが、私たちが直接つなげていくことは、これまではありませんでした。

自治体の中でも、児童扶養手当の係とか、生活が困窮した場合の係とかとは、意識してつながるようにしていますが、保健師さんが、どこまで対応してくれるのかというイメージをもう少し持ちたいという気持ちがあります。情報交換をしていけば、もつとできることもあるのだらうなとも思います。

—情報交換の必要性がある場面はどこかに必ずありますよね。

赤石 私たちの活動はインフォーマルなので、相手に合わせていろいろなことをやっています。以前に、10代で出産した女性のサポートをしていたことがあるのですが、ボランティアスタッフと私が家を訪れると、「昨日は保健師さんが来てくれた」という話を聞きました。私たちは週に2〜3回行っていたのですが、偶然そこで出会っ



スタッフの方とともに

ないかという機運はあります。出産前にはマネジメン的な責任ある仕事をしていた人も、アルバイト的な仕事しかできないというような状況が今もありますが、元々のキャリアを再評価するようになるのではないかと期待したいところです。

正規採用が増えるためには、ファミリーサポートセンターやヘルパーの派遣など、公的なサービスがもっと充実する必要があります

ていれば情報交換ができていたかもしれないが、すれ違ったままやっていったという感じでした。個人情報があるので、連携をするのは簡単ではないかもしれませんが……。

—保健師さんに、何か要望はありますか？

赤石 特定妊婦の支援とともに出産直後の支援も必要です。妻は慣れない子育てがたいへんで、夫に目を向けられなくなり、夫は妻にかまってももらえないので不満になり、DVや浮気などをする。そして離婚に至るというわけです。そこで、もう少し早い段階で、地域の支援といったフォローがあれば違うのかなと思うことはあります。

そして、小さな子どもを育てながら仕事をしているお母さんが、より待遇のいい仕事にチャレンジしていけるように、ヘルパー制度など、サポート体制をもっと充実させる力添えをしていただけたらいいと思います。